

プラゴミ、温暖化…演じ伝える

子どもの感想励み 活動10年

演劇を通じて環境問題を啓発してきた松江市の市民団体「くにびきエコクラブ」の活動が10年になる。時流に合わせてテーマを変えながら、子どもたちに問題を分かりやすく伝えようとしてきた。高齢者が中心の団体だが、観劇後の子どもたちの反応を支えに「長く続けていきたい」と話している。

高齢者中心 くにびきエコクラブ

「今、世界中で問題になっているのが使い捨てのプラスチックごみ。風に乗って川から海に流れ着いています」

商店街の勉強会との設定で、環境問題に詳しい教授役の男性が商店街の住民に扮した人たちに説明する。創作劇「海亀の涙」の一幕だ。スーパリーの店主が孫と一緒に、プラスチックごみが海を汚している現状を学び、レジ袋有料化などの活動を試みていくストーリーになっている。

18日、松江市西浜佐陀町の古江公民館で、くにびきエコクラブが地元の小学生や住民たち約90人を招待し披露した。劇中では、実際に撮影されたストローが鼻に刺さって流血するウミガメの映像なども流れ、子どもたちは真剣な顔で見入った。

くにびきエコクラブは2009年、県社会福祉協議会が

運営する高齢者が地域活動などを学ぶ学校「シマネスクくにびき学園」に通う仲間たち25人で結成した。現在のメン

バーは平均約65歳の39人。環境問題に関する創作劇を年間5回ほど、主に小学生に向けて学校や公民館で上演。街頭でエコバッグ利用などの啓発活動も続け、14年には環境大臣表彰も受けた。

創立者の山口信夫さん(76)は、元警察官で退職後にくにびき学園に入った。地球温暖化に関するニュースに触れるうちに、「人間がまいた種で責任がある。これから向き合うべき問題だ」と感じ、同じ

学園の仲間にも声をかけた。「多くの人に分かりやすく知ってもらえるから」と高校時代に演劇部に所属した経験を生かして脚本から演出までを担当し創作劇を始めた。

これまでに20作、県東部を中心に約60回上演してきた。テーマは時流に合わせて地球温暖化から、食品廃棄や食べ残しなどの「フードロス」問題へと変わり、今年も国際的に問題になっている海洋のプラスチックごみを取り上げる。

10年の活動の励みになっているのは劇を見る子どもたちの存在だ。劇の上演後に毎回アンケートをとり、感想をメンバーで読み合うのが一番の楽しみ。伝わっていないささうであれば、すぐに簡単なセリフに変える。会長の北垣幸久さん(72)は「子どもたちは本当に純粹で、色んなことを感じてくれる。それで次もやろうと励みになる」と話す。

子どもたちにもっと親しんでもらおうと、16年からは小学校に出向いてごみの分別やLEDライトの使用を体験してもらった。北垣さんは「小さな動きかもしれないが、あるとないでは全然違う。環境問題の解決につながるかもしれない。細々とも長く続けていくことを念頭に、これからも頑張っていきたい」と話した。



演劇「海亀の涙」の一場面。真ん中に立ち、環境問題について解説する教授役の山口信夫さん＝松江市西浜佐陀町

(市野塊)